



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学

HU

2010年  
12月発行  
Vol.7

# 教育GPニューズレター

Hokkaido  
Information  
University

## 巻頭言

### 現代学生の生い立ちと FDの今後

和田龍彦

北海道情報大学では、昨年度「日本高等教育評価機構」による認証評価を受審し、滞りなく認証を終えたところである。現在、今後の評価機構の改変等を踏まえ、より良き大学教育と言う認識のもとで種々の点検評価が実施されている。勿論、本誌の主題たるFD（Faculty Development、大学教員の教育能力を高めるための実践的方法）に関わる評価も申し分のないものであったと聞く。また、本年9月10日にはカリキュラム・アドバイザーボード会議が開催され、次年度のカリキュラム関係の報告の後、アドバイザーによる丁寧なコメントがあった。この詳細については、本誌の「第4回カリキュラム・アドバイザーボード会議の開催報告」をご覧ください。また10月28日には教育GP推進協議会が開催され、FD内のそれぞれのワーキング・グループの発表ならびにFD評価委員の方々からの提言があった。

さて、大学の現状を見直すとき、大きな社会的問題に巻き込まれていることに気づかされる。この問題は、本学の特徴として周知されている高就職率に多大な影響を与えることになる。すなわち、わが国において

は、昨年に引き続き今年度も卒業時就職の困難な年となり、まさに就職氷河期に入り込んでしまった感がある。その原因の一端が、大学教育にもあるのではなかろうかと疑問視する者がいてもおかしくはない。特に、本誌の中核とも言うべきFDに携わっている者にとっては、これまでの教育方針に間違いはないのか、教員の質との関連性はないか等々、次々と不安内容が浮かび上がってくる。勿論、特別な理由がない限り、大学教育と現状の就職困難要因とは切り離して考えるべきであろう。なお、このような問題があるがなかろうが、FDに関わる検討は常日頃行うべきであることを、誰しもが重々承知のことである。

一方、これからの大学教育のあり方や就職活動の指導法を問うためにも、我々が教育対象とする学生の生い立ちを知ることは、全ての方針付けに関わる重要な情報となるはずである。そこで、これまでの社会状況や環境を背景として育ってきた今の学生達が、どのような教育経緯を経験してきたかを振り返ってみる。

昨年および今年卒業した現役学生は、バブル景気の終焉時あたりの1987年～1988年に誕生している。したがって、1990年代に始まった「平成不況」の真只中で育つこととなり、幼児期にバブルのかけらを体験したとしても、小学校に入るころには好景気も過ぎ去っていたはずであ

## 目次

1. 巻頭言..... 1
2. 第4回カリキュラム・アドバイザーボード会議の開催報告 3
3. E-Learn2010参加報告... 5
4. 学生FD活動報告..... 8
5. 教育GP国際FDエキスパートフォーラム2010.....10
6. EDUCAUSE 2010参加報告13
7. FD活動 行事(実績・予定) 16
8. FD委員会WGの活動実績 16
9. 編集後記.....16

る。その小学校において、彼らは俗にいう「ゆとり教育」世代として育つことになり、入学時からすでに第2土曜日は休み、さらに2年生に進級すると第4土曜日も休みになってしまった。小学校高学年のときに身近にあった都市銀行や国際的な大手証券会社が破綻し、中学生になったころには「平成不況」の影響によってリストラが増え始めていた。そして中学校2年生から3年生にかけて施行された週5日制により、残っていた土曜日授業も全くなくなってしまった。その後、ほとんどの者が高等学校へと進むが、一般にこの時代の成長過程で生じると言う「反抗期」も、あまり呈することなく卒業したと聞いている。

大学入試の基準が変更され、センター試験に英語のリスニングが取り入れられるようになった折りではあるが、この世代の6割に近い高校卒業生が大学や短大へと進学し、それまでとは違った高進学率の年となっている。大学へ入学した彼らが順当に4年生まで進学すると、その卒業年は2010年もしくは2011年になる。その時が今である。2008年までの2、3年間は「売り手市場」の恩恵を受けた者も多々いたが、世界的金融危機などによって景気も悪化の一途をたどり、いまだ回復の兆しが見えず、卒業生の就職状況も落ち込んでしまった。これが現状である。

「ゆとり教育」への不評が持ち上がったころ、15歳3カ月から16歳2カ月の生徒を対象とした国際的な学力調査、すなわち学習到達度調査(PISA: Program for International Student Assessment)が、OECD加盟国によって始められた。PISAによる調査結果は2000年から3年間隔で報告されている。日本の中高生の学力は、2000年の最初の調査結果【総合読解力；8位、数学的リテラシー；1位、科学的リテラシー；2位】を最上位とし、その後は年々落ち込んでおり、2006年度の調査結果【読解力；15位、数学的リテラシー；10位、総合科学的リテラシー5位】になってしまった。特に2006年の調査結果から、読解力や記述式問題、さらには知識を活用しなければならない応用問題に課題が残されていることなどが明らかになっている。

以前よりの苦言・提言の後押しもあり、文部科学省から2001年に「小学校児童指導要録、中学校生徒指導要録、高等学校生徒指導要録、中等教育学校生徒指導要録並びに盲学校、聾学校及び養護学校の小学部児童指導要録、中学部生徒指導要録及び高等部生徒指導要録の改善等について」が公開され、2008年の「小学校学習指導要領等に関する移行期間中における小学校児童指導要録等の取

扱いについて」によって、周知の新学習指導要領の実施が進められた。これにより、小学校では2011年度から、中学校では2012年度から、そして高等学校では2013年度から学年進行で新学習指導要領のもと、新授業が行われる予定である。なお、2009年度より小中学校で新しい学習指導要領の一部が先行実施されており、高等学校では理科や数学などが2012年度から取り入れられることになっている。これにより、1996年度生まれ以降の者は、いわば「脱ゆとり教育」を高校にて受けることとなり、2015年度からは新学習指導要領による世代が大学に入学することになる。

本学にも、新たな初等教育ならびに中等教育を受けた学生が近々に入学して来ることになり、彼らを対象とした新たな教育方針をも早急に検討しなければならない。とは言え、これまでの「ゆとり教育」を受けてきた学生も、2014年度までの数年間は入学して来る。「ゆとり教育」と「脱ゆとり教育」にて能力や技能に相違を生じた学生が来たとしても、これに対処でき得る柔軟な姿勢と幅広い考え方が持てるよう、各教員はそれぞれ努力すべきである。なお、いずれの教育を受けたとしても、大方の大学にはこれとは別に「入学生の学力レベル差」と言う大きな問題も残されている。これに対処すべき教育体制、すなわちボトムアップと同時にトップケアを行い得るカリキュラムの構築、落ちこぼれを防ぐための正規開講科目外のリメディアル教育、さらには効率の良いチュータ制度の利用などの検討も急がなければならない。本学のFDにおいても、テーマ毎のワーキング・グループにて検討が進められており、これらの結果の一部については既に本誌にも掲載した。

大学教員は、大学教育の大前提とも言うべき「模範と指針を示すこと」、「学習目標を明確に示し、常に授業改善に努めること」、「学生の自主的学習を支援すること」、等々を念頭に、自らの質を高めるために自己研鑽に励み、より良き教育指導を行わねばならない。しかしながら、教育の世界も「言うに易く、行うに難し」である。それゆえ個人的評価のみに頼らず、本学においても、教員同士による相互評価(ピアレビュー)や見識者による外部評価などを実施し、種々の評価組織を構築してきた。お互いに努力し、そして苦勞をして作りあげた組織である。これから次々と得られるであろう結果を無駄にせず、よく審議し、今後とも「より良き教育」に生かし得るよう精査を続けて行きたいものである。

## 第4回カリキュラム・アドバイザーボード会議の 開催報告 WG8（カリキュラムディベロップメント）

### カリキュラム・アドバイザーボード会議の役割

視界ゼロと云われている時代に、時代のニーズを先取りしたカリキュラムを考えることは容易ではない。FD委員会のWG8（カリキュラムディベロップメント）は、現行のカリキュラムが、社会のニーズや情報技術の進展に適切に対応しているかを、企業や病院における経営、情報、メディア及び医療等の分野で高い識見と経験を有する外部アドバイザーから「カリキュラム・アドバイザーボード会議」を通してレビューしていただき、時代を先取りしたカリキュラムの開発をミッションとしている。WG8の活動は、富士副学長、中村忠之先端経営学科長、森澤システム情報学科長、和田医療情報学科長、藤井情報メディア学科長、加藤教養部長、近藤事務局長、木田教務課長の教職員のメンバーと外部アドバイザーの協力によって行われている。

### 外部アドバイザーのメンバー一覧

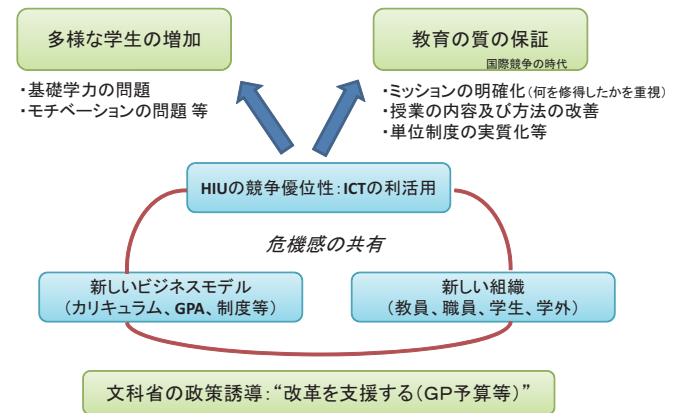
分野	氏名	勤務先等
経営	武田 安正	アクセンチュア(株) 代表取締役副社長
情報	明神 知	(株)オージス総研ソリューション開発本部 エクゼクティブフェロー
	福井 素子	日本アイビーエム(株) 執行役員クロス セクター・サービスマネジメント担当
医療	秦 温信	札幌社会保険総合病院 病院長
	小笠原克彦	北海道大学 大学院保健科学研究院教授
メディア	佐々木邦俊	オフィスKUNI 代表
	里見 英樹	(株)メディアマジック 代表取締役
教養	横山 憲治	元 北海道テレビ放送(株) 取締役

### 環境の変化への的確な対応

カリキュラムの見直しを進めていく上で、我々を取り巻く環境の変化として「多様な学生の増加」と「教育の質の保証」を強く認識しておく必要がある。本学のみならず、従来のままの教育方法・教育体制・教育システム、そしてカリキュラムでは対応が困難であり、教育イノベーションが求められている。基礎学力の問題やモチベーションの問題を抱えると同時に、国際競争を意識した教育の質保証の観点から、卒業するときには取得単位数だけでなく、「何を修得したか（何がで

きるか）」が重視されようとしている。このような環境の変化に的確に対応するための1つとして今回のカリキュラムの見直しでは、コンピテンシー（知識・スキル）の導入を図った。

### 教育イノベーションの必要性

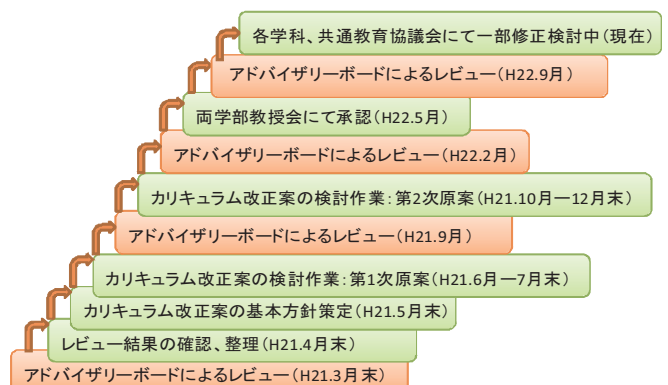


### これまでの活動内容

平成21年度は、外部アドバイザーのレビュー結果に基づいて平成23年度カリキュラム原案を作成した。そして、平成22年度にはカリキュラム・アドバイザーボード会議を前期と後期に各々実施し、その原案をレビューしていただいた。

カリキュラム見直しの基本方針は、建学の理念や大学の使命等から「目標とする人材像と、それに必要なコンピテンシー（知識・スキル）」を明らかにし、そのコンピテンシーを実現するために必要な科目を決めることとした。この基本方針のもと各作業は、各学科と教養協議会（平成22年度から共通教育協議会）で進められ、その中で、外部アドバイザーからの提言や認証評価での指摘事項（CAP制への対応等）などを取り込みながら原案をブラッシュアップしていった。平成22年5月の両学部教授会で、平成23年度カリキュラムとして審議、承認された。その後、各学科と共通教育協議会で確認、検討作業が必要に応じて進められている。

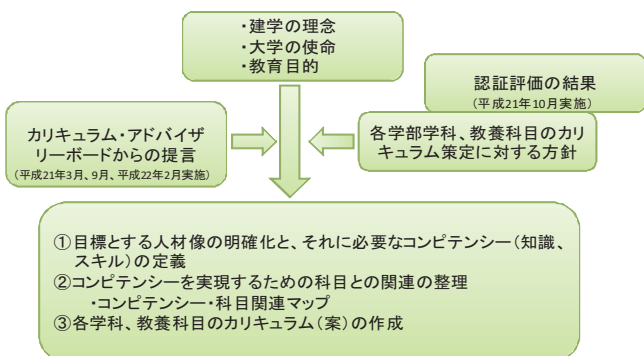
### 平成23年度カリキュラム改正にむけて



外部アドバイザーからのコメントで、各学科共通の内容で指摘された主なものは、次の項目である。

- ・コミュニケーション能力の養成
- ・英語力の強化
- ・情報倫理、企業倫理等の倫理教育
- ・基礎学力の向上
- ・問題発見、分析、解決能力の養成
- ・主体的、自律的学習を中心とする教育方法
- ・学科、学部横断的なプロジェクトによる体験学習
- ・集中力、繰り返しを考慮した授業時間の配分

### カリキュラム見直しの方針



今回のカリキュラム改正では、上記の最初の3項目に関して議論がなされ、その成果が反映されている。また、専門科目で指摘された事項に関しては、各学科で議論され、各学科のカリキュラム方針とすり合わされたものとなっている。

### 第4回カリキュラム・アドバイザーボード会議

本会議は、平成22年9月10日(金)、11時から3時半まで開催された。長谷川学長の挨拶から始まり、会議の前半では、富士副学長の「教育G Pプロジェクトとカリキュラムの見直し」のこれまでの経過説明と、各学科長と教養部長からカリキュラム最終案の説明を行った。その後、8名の外部アドバイザーからカリキュラム案は良く仕上がっているという評価と大変貴重なコメントをいただいた。その一部を紹介する。

・産業界でもアーキテクトの人材が少なくなってきたので、ITアーキテクトコースを作ったことは先見の明がある。

・先端経営の分野では、ITと経営・会計を関連させ、起業などに結び付けることも考えられる。

・情報大学の特徴は、大学と専門学校のそれぞれ良いところを融合させているところであり、教養とスキルを両立させるようなカリキュラムに仕

上がったのではないか。

・よく練られたカリキュラムになっている。  
(医療情報分野)

・医療現場のニーズを教育に取り込むためにプロジェクト演習などを取り入れてほしい。

・北海道はコンテンツの宝庫である。それらを活用できる技術力・人間力・社会性をもった人材を育成してほしい。

・モバイルコンテンツは将来性があるので、マーケティングの要素も盛り込みながら顧客に満足を与える実践力を身につけてほしい。

・これまで「倫理観」、「説明・発信能力不足」、「国際化への人間像」といったことを主張してきたが、教養の人材像やコンピテンシーに、そのような要素が明記されていてうれしく思う。

・今後は、さまざまな科目・コースの中から学生が適切に選択できるガイドやサポートの体制を、来年以降、何らかの形で整えていくと良いだろう。それによって、出来上がったカリキュラムが、学生や教員にフィードバックとして返ってくるのではないか。



会議の後半では、富士副学長から「中長期的な視野から望まれる教育分野」についての問題提起がなされ、各外部アドバイザーから有益なコメントをいただいた。

・ビジネスの世界では、マーケットチェンジが起きており、18歳だけを対象としないで社会人や団塊の世代を見てカリキュラムを考える。

・人間は自分で「気づく」ことで変わろうとする。そのためには、年齢、性別、国籍を超えた多様なコミュニケーションを行うことが良い。学年や大学を超えたワークショップ形式の授業やプロジェクト演習などを取り入れてみてはどうか。

このように今回の会議は、教職員にとって「いい気づき」の機会になったと思う。大変お忙しい中、出席された外部アドバイザーの皆さまに感謝の意を改めて送りたい。

## E-Learn2010参加報告

経営情報学部システム情報学科  
谷川 健

本学の教育GPプロジェクト「ICTによる自律的FD推進モデルの構築—ファカルティポートフォリオシステムの開発、導入による教育の自律機能の実現—」も今年度で最終年度を迎えます。このプロジェクトの中心である「自律的FD推進モデル」を具現化したFD活動支援システムであるCANVAS(Creative Activity for Nurturing Value-Added Students (by using a Faculty Development support system))は、今年度から全教員による試用を開始しています。このCANVASを開発した経緯およびシステムの概要を論文としてまとめてE-Learn2010に投稿したところ受理されました。受理された論文を発表するためとeラーニング関連の最新動向を調査するために、谷川とメディア教育センターの前田真人氏が2010年10月18日(月)～22日(金)に米国フロリダ州オーランドで開催されたE-Learn2010に参加してきましたので、発表の様子とカンファレンスの概要等について報告いたします。

E-Learn(World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare, & Higher Education)とは、ACE(Association for the Advancement of Computing in Education)が主催するeラーニング関連の国際学会で、今年のE-Learn2010は、ディズニーワールドがあるフロリダ州オーランドのリゾートホテル「Wyndham Orlando Resort」で開催されました。このホテルは、広大な敷地に2階建ての100室程度の建物が20個くらい、コンベンションセンターといくつかのプールなどがあります。カンファレンスは、コンベンションセンターを中心に大きなホールと10室程度の比較的小さな会議室で開催されました。おそらく昨年と同じ1000名程度の参加があったと思われます。日本からもフルペーパー6本、ブリーフペーパー6本、ポスター6本の発表がありました。



会場の案内図



E-Learn2010受付の様子

私たち(Takeshi Tanigawa, Takanori Yamakita, Toshifumi Fujii, Makoto Maeda, Takashi Fuji)は、「Construction of Driving Model with Faculty Perspectives of ePortfolio for Improving University Education in Japan」というタイトルの論文を投稿しました。この論文は、日本におけるFD活動の現状、システム駆動によるFD活動の必要性、ファカルティポートフォリオを中心とした自律的FD推進モデル、FD活動支援システムCANVASの概要と機能評価などについてまとめたものです。この論文は、投稿数693から採択された444本に選ばれて発表する機会を得ました。また、プログラム委員会の審議の結果、4本の「the Outstanding Papers」の一つに選出されました。

Dear Takeshi Tanigawa:

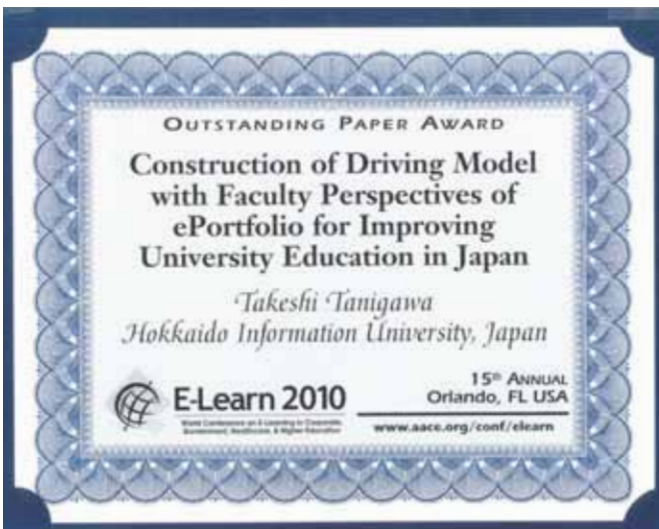
I am pleased to inform you that, after rigorous review by the E-Learn 2010 Program Committee and Program Chairs, your paper, "Construction of Driving Model with Faculty Perspectives of ePortfolio for Improving University Education in Japan," has been selected to receive an Outstanding Paper Award!

「the Outstanding Papers」を通知するメールの一部

10月20日（水）のKeynote Speechに先立って、受賞者の発表と表彰式がおこなわれました。私は2番目に呼ばれて表彰状を受け取りました。



授賞式の様子



表彰状

発表は10月20日の13時30分から14時30分のセッションの後半30分に行いました。このセッションは、私とベネズエラの女性の方の2名の発表で、どちらも英語ネイティブではないのでお互い少し安堵しました。ベネズエラの方が最初に発表され、このときは10名弱の聴講者でこんなものかと思っておりましたが、私の発表のときはアジア系と思われる聴講者が増えて30名くらいの前で発表することになりました。発表は、英文を読むシーンが多くなり、ちゃんと伝えられなかったのではないかと反省しております。質問が一つあったのですが、上がっていたせいか質問の意図が理解できませんでした。たまたま、片言の日本語を話せる女性の方がおられ、「このシステムを使って従来の方法、例えばeメールなどの方法とどう変化したか（良くなったか悪くなったか）」という質問であることがわかり「使いやすくなった」と回答しました。英語力のなさでうまく発表できませんでしたが、発表後は個別に内容をたたえるいくつかのコメントをいただき、つたない発表を聞いていただいたことに対する感謝の気持ちを強く感じました。



発表の様子

今回のカンファレンスでは、携帯電話等の普及、ブログやソーシャルネットワークなどの情報発信型ツールの進展などをどのように教育に取り入れて、高等教育における課題を解決するかというのが大きな流れとしてあったように感じまし

た。Open Keynoteでは、Stanford大学のPaul Kim先生が、高等教育機関における環境への取組みの重要性が述べられました。この講演の中で、携帯端末やオンライン学習などのICTの活用は環境への配慮の一面があることが指摘されました。Keynoteの一つでは、CiscoのMichelle Selinger氏が、新しい形のBlend of Learningの到来について講演されました。この講演では、携帯電話が発展途上国も含めて多くの国に浸透し、On Campusの教育環境からさまざまな場所における携帯端末を利用した教育が可能になり、従来高等教育を受けられなかった人たちが高等教育を受ける環境が整っていること、および各高等教育機関がこれに応じて教育機会を増やしていくことの意義を述べられました。これは、昨年聴講したEDUCAUSEでも同じような主張がありました。社会が、ほとんどの人に、定型的な仕事より思考力や発想力を求められる仕事を要求する時代にきており、コストをかけずに多くの（理想的には、すべての）人たちに高等教育を提供することが求められていることを考慮すると、携帯端末などを中心にしたICTを利用した教育環境の提供はますます重要になると感じました。また、招待講演の一つでは、Florida州立大学のVanessa Dennen先生がBlogなどを中心にした情報発信型のツールをどのように教育に使うかの講演がありました。また、一般発表でも、Facebookを教育で利用した報告があり、聴講者はほぼ満員で、ソーシャルメディアの教育への利用に対する関心の高さを実感しました。教育にソーシャルメディアや情報発信型のツールをどのように使うかは、まだ確立していないように思いますが、学生を自ら学ばせるためには、有効な手段の一つになるのではないかと思います。

次回のE-Learn2011は、2011年10月にハワイ州ホノルルで開催されます。本学でも教育関連の研究をされている教員、大学院生や学生が多くおられると思いますので、発表を検討していただければと思います。



E-Learn2011のポスター



Keynote Speechの様子

E-Learn2010で発表の機会を得たのは、教育GPシステム開発会議のみなさまと教育GPへの取組みに協力していただいている教職員のみなさまのおかげだとおもっております。最後に、みなさまに感謝してE-Learn2010の参加報告といたします。

## 学生FD活動報告

### 上杉正人

今年の夏に2つの学生FDに関する会議が開催された。そのひとつはFDネットワーク“つばさ”で、札幌大学において7月22日に開催された。もうひとつは「学生FDサミット・2010夏」で、立命館大学衣笠キャンパスにおいて8月28日、29日に開催された。いずれの会議も学生と大学職員が大学教育改善のために熱い議論がおこなわれたようだ。各会議に本学からそれぞれ2名の学生が参加したので彼らの参加報告を紹介する。彼らにとって大きな飛躍の“夏”になったようだ。

### ○FDネットワークつばさ

#### 情報メディア学科 2年 知久 貴大

今回、私はFDネットワーク“つばさ”2010学生FD会議「ツバトーーーク」に参加した。その中では新しいコミュニケーションツールとして「twitter」の紹介や、学生同士、学生と教職員の方たちとのディスカッション、情報交換会などがあり、今までこうした他大学との交流をしたことがなかった私にとってはとても新鮮で、大変充実した会議だった。



ディスカッションのテーマは「学生発信の大学改善～学生たちが出来ること～」で、私のグループでは「大学でのコミュニケーション」について特に話題に挙がった。他では全く別の問題に着目

していたグループや、同じ問題でも違った視点で取り上げているグループなどもあり、大変勉強になった。情報交換会でも、今後学生FDとして活動していく際に大変参考になる意見など多く聞け、本当に有意義な時間を過ごせた。

最後に、私は学生FD委員として、こうしたイベントで得たものをしっかりと生かせるような活動をしていこうと思う。

#### 経営ネットワーク学科 4年 大久保 翼

今回参加したのはFDネットワーク“つばさ”学生FD会議2010 in札幌大学 ツバトーーークです。“つばさ”が送る学生と教職員のトーク会と題されており、「学生発信の大学改善～学生たちができること～」がテーマとなっている。このFDネットワーク“つばさ”は東日本地域の大学・短大・専門の今日聞く改善を推進することを目的とし、山形大学が中心となって発足した組織である。現在は40校以上の学校が参加し、共同で会議や研修会などのイベントを行ったり、Web等を使っただけの情報共有といった活動をしている。今回は、学生FD会議ということで、学生もスタッフとして企画参加していました。本校はこの“つばさ”には参加していませんが、今回この会議に参加しました。流れとしては講演、ディスカッションが2回という流れになっており、講演では「新たなコミュニケーションメディアの可能性」というテーマのもとに、いま流行しているtwitterに触れてみようということで説明のあと実際に参加者らがIDを作成し、実際に“つぶやき”や“フォロー”などを行った。これにより会議等で出会った人々とフォローしあって気軽に情報共有することが可能となり、まさに新しいメディアだと実感した。その後、メインテーマを学生のみでディスカッションを行った。人数は6人程度で自己紹介から始まり自身の学校紹介、そして本題へと進んだ。そして、そこに教職員が後ほど加わりグループとしての結論をまとめ、最後に発表するという流れであった。発表では生のコミュニケーションが不足している、人・機会・透明化が重要だといった意見やアナログtwitterなるものをやろうと意見もあった。文章量の関係ですべてを紹介するのができないのが非常に残念なほど良い意見が多く、本校における学生FDの今後の活動のひとつのヒントとなった会議となった。



## ○学生FDサミット・2010夏

### 医療情報学科 3年 土井 翔太

今回、私と大久保くんの2名で京都の立命館大学で行われた、学生FDサミットに参加しました。参加人数は教職員の方々を含め212名ととても多くの方々の参加がありました。このサミットではしゃべり場とグループワークを行いました。しゃべり場では「大学の教育と高校までの教育」「どんな授業を望んでいる?」「大学生活を充実させるには?」「成績評価についてどう思う?」「大卒ってなんだろう?」という5つのテーマについて20グループ(各グループ10名程度)に分かれて、およそ100分間話し合いました。このしゃべり場は最終的な答えはださず、みんなが自由に意見を出し合い、討論しました。普段の授業ではこのように討論する場はないので、最初はとまどいもありましたが、討論をしていくうちに段々と雰囲気になれていき、とても楽しくなりました。

次にグループワーク(昼食時間含め170分)ですが、これは前に述べた5つのテーマから1つを選び最終的に結論をだします。ここでもグループにわかれて話し合いました。討論が終わると各グループのリーダーがみんなの前で、出た結論を発表します。この発表を通して、他のテーマでの議論の結論や、どうしてその結論に至ったのか、その過程を知ることができました。今回のサミットに参加してみて、今まであまり他の大学の人と話す機会がなかったのですが、サミットには様々な大学の方が来ていて、みんなモチベーションが高く、とてもいい刺激になりました。



### 経営ネットワーク学科 4年 大久保 翼

2010年の本校学生FD活動でサミット等への参加は2回、札幌大学でのツバトワークと京都立

命館大学でのサミットである。僕はこの両方に参加することができ、また4回生ということで他メンバーを率先して行くことが自身の役目であると感じている。両方のサミットに参加して大きく実感したことは、大学の規模や土地柄で学生FD活動内容自体も学生と教員、職員との関係が大きく違うことである。学生は学ぶために、教員は学生への講義と自身の研究のために、職員は大学という組織を運営するためにいると思うのだが、これら三者間の協力体制ができていること、それが大学改善で必要かつ最低条件だと感じた。また、大学規模も大きければ大きいほど情報共有や伝達、意思決定は遅くなってしまふ。予算的に余裕があっても、改革には非常に大きな労力が必要である。本大学はどちらかと言えば小規模の大学である。はじめは小さい大学だからたいしたことができないとネガティブな気持ちで参加したが、サミットに参加した後は小さいからこそ、機敏に活動できるのではないかと感じている。さらに本学の学生FD活動に教員、職員ともに協力体制が整っているのだから、改善の最低条件は満たしており、僕が大学にいる間になるべく多くの活動を行い、学生らにその活動を浸透させていきたい。目指すは学生FDといえば、北海道情報大学と言われるよう本大学の文化のひとつにできればと思う。このような活動への参加は私自身を見つめ直すいい機会でもあった。教育ということについて深く考える機会が格段に多くなった。それに伴って政治や国際情勢も学ぶ機会が増え、また興味が多く湧いた。日本政府は先進国の中でもっとも教育にお金を使っていないということを実感した。それだけでなくいろいろな人たちと話し合いをしたことは人生にとっても大きな経験になったのではないかと感じている。学生の中には大学に不満を持つ人が多くいると思う。そんな人にこそ学生FDに参加してもらい大学全体を改革、いや創新(イノベーションの中国語訳)してほしいと思う。



# 北海道情報大学 教育GP国際FDエキスパートフォーラム 2010

WG 5 leader: Simon Thollar

北米でのファカルティ・ディベロップメント (FD) の状況を調査するため、昨年 (2009 年)、9月13~17日までの期間、FD委員会 WG2, 3, 5, 7 の各リーダー4名の視察団が米国、ニューヨーク州に行きました。我々、視察団はカニシアス大学、ナイアガラ大学、バッファロー大学の各FD担当者を訪問し、それぞれのFD活動状況について調査を行いました。その際、カニシアス大学FDセンターのディレクター (Director, Center for Teaching Excellence) であるパトリシア・カワード博士とお会いする機会を得ました。



視察団は、カワード氏がカニシアス大学で展開するFDプログラムに感銘を受け、氏をぜひ北海道情報大学に招いて、効果的にFDを実施するためのワークショップを開催したいと考えました。幸い、文部科学省による指定を受けた教育GPの一貫として、2010年9月17日にカワード氏を招いて、講演とワークショップを行う機会を設定することができました。そして、北海道情報大学、教育GP国際FDエキスパートフォーラムとしてイベントを実施しました。

1日を通して行われたフォーラムは、2つの講演を行う午前の部とワークショップを行う午後の部に分られました。講演、ワークショップとも多くの参加者を得て、価値があり、情報に富み、また楽しいものにもなりました。午前、午後とも、谷さつき先生に通訳をお願いしました。谷先生のすばらしい通訳は、参加者の内容の理解、インタラクションの活性化に多に貢献し、フォーラムの成功要因の一つとなりました。



## 北海道情報大学 教育GP国際FDエキスパートフォーラム2010

最初の講演は、「ファカルティ・ディベロップメント：北米高等教育における動向」と題して行われました。講演は、「高等教育機関を動かす原動力となるのは教員集団である」という前提に基づいて行われました。まずカワード博士は、講演の中で、教員を成長させる方法、また、配慮する点について確認しました。これには、教授スキル、教育方法および組織としての発展、FD方法の多様なタイプ・プログラム・モデルが取り上げられました。



第2の講演は、「学び中心の教授：北米の高等教育における教授法」と題して、50名（教員41名、その他9名）の参加を得て行われました。この講演では、カワード博士は、学習の認知に関わる原則、「学習者中心の教室」の概念について取り上げました。講演のねらいは、氏の最後のまとめ「最善の学習は、参加者が活発に関わる状況において実現される」という言葉に集約されました。

2つの講演とも大変興味深く、参加者からもこれまでの行事を越える肯定的なフィードバックを得ることができました。全ての参加者は、新しい知識を得ようと、意欲的に参加しているようでした。



## 北海道情報大学 教育GP国際FDエキスパートフォーラム 2010

午後の部は、参加者がより積極的に関わるワークショップ形式で行われました。テーマは、「能動的学習が起こる教室環境の促進」です。カワード博士は、「能動的な学習」を定義、焦点化した後に、学部教育において良い実践を行うための7原則を展開しました。これまでの研究について議論するとともに、多様な状況においてどのように教員として対応すべきなのかについての助言が行われました。午後の部は、参加者の積極的な参加により活発に展開され、大変価値のあるものとなりました。



午前の2回の講演、午後のワークショップのいずれも盛況で、予定の時間を過ぎても討論がなされるほど熱のこもったものでした。

午前の講演では、(1)アメリカにおける、FDに関する組織的な取り組みの展開、(2)学習者中心の教授法の原則やそれを実践する際のポイントに関する説明が行われました。その上で、午後のワークショップでは、能動的学習の定義や効果、特徴等に関する説明とともに、その実演がなされ、参加者が実際に能動的学習を体験することができました。

1クラスの学生数が大きく異なる(カニシラス大学の場合、1クラスの学生数が通常で20~30名、最大でも60名)など、置かれている状況や組織のありようが本学とは異なるため、今回得たことを日々の教育実践に反映させるには検討と工夫も必要であると考えられますが、今回のフォーラムは、本学のFDのさらなる向上に役立つヒントを提供する機会となったと考えられます。

今回のフォーラムの様子は、ビデオ収録されPOLITE上で視聴が可能です。また、貸し出し用のDVDも整備しました。今回の国際フォーラムの大きな成功を受け、WG5では、次年度以降の行事実施について計画を行っています。



## EDUCAUSE 2010参加報告

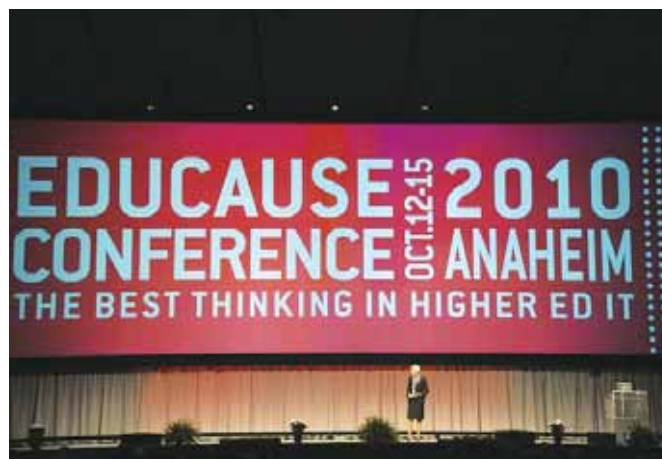
経営情報学部医療情報学科  
講師 田中洋也

2010年10月12日（火）から4日間の日程で、米国カリフォルニア州アナハイムで開催されたEDUCAUSE 2010に参加しました。その視察状況を報告します。

### EDUCAUSEとEDUCAUSE 2010の概要

EDUCAUSEは、情報技術（IT）の活用により高等教育機関の教育、研究活動の発展に寄与することを目的とした米国の非営利団体（NPO）です。大会の主な参加者は、高等教育機関の最高情報責任者（CIO）、インストラクショナルデザイナー、情報セキュリティー担当者、教員に加え、政府機関、企業関係者です。2010年大会は、世界41カ国から4,700名以上の参加者と2,600名以上の企業関係者、スタッフが参加し、7,300名余の参加者がありました。EDUCAUSEは、様々な事業を展開していますが、オブリンガー会長によると最近では、以下の3つの事業に特に力が注がれています。

- (1) Core Data Service (CDS) : 高等教育機関でのIT導入状況に関するデータを公開、およびその活用の促進
- (2) Advanced Core Technologies (ACTI) : 教育機関同士、教育機関と企業など機関間の協同事業・研究のサポート



メインホールとオブリンガー会長  
EDUCAUSE 2010看板

- (3) Next Generation Learning Challenges (NGLC) : Bill & Melinda Gates 財団からのIT活用研究・教育の助成金事業

EDUCAUSE 2010大会の最大のニュースは、マイクロソフト創始者、ビル・ゲイツ氏の財団による助成制度（NGLC）の発表でした。この助成は、低所得者の若者を対象とした大学入学資格保有者の拡大と大学卒業率の上昇を目的とした研究、実践活動に対して与えられるもので、初回は200万ドルの規模で計画されています。大会期間中は、説明会が複数回にわたって開かれ、参加者の注目を集めていました。高等教育機関におけるIT活用関連のデータを提供するCDSについては、EDUCAUSEのホームページ(<http://www.educause.edu/>)にアクセスし、利用する事ができます。



アナハイムコンベンションセンター（会場）  
メインホール



コンベンション 受付

### 日本版EDUCAUSEと各国関係機関の動向

日本にもEDUCAUSEのような団体を設立し、高等教育機関におけるIT活用をさらに推進しようとの理念のもと、大学ICT推進協議会（仮称）の設立委員会が発足しています。本学からは、経営情報学部、谷川健教授が設立準備委員会に参加されています。EDUCASE大会期間中の10月13日（水）には、設立準備委員会に関わる日本人参加者とEDUCAUSE幹部による会議が開かれ、私も出席する機会を得ました。日本の大学ICT推進協議会のように、各国関係機関とEDUCAUSEの連携・協力関係も急速に拡大し、今年はスウェーデン、韓国からの参加者とも会合が開かれたそうです。すでに強い協力関係にあるオランダ、カナダ、英国、オーストラリアも含め国際的な連携が強化されています。

### 講演・発表—Abilene Christian Universityの事例

大会期間中、様々な発表、講演に参加しましたが、今回は紙幅の都合上、一つの事例を取り上げて報告します。Abilene Christian University(ACU)は、テキサス州にある、学生数約4,700名のキリスト教系文系総合大学です。EDUCAUSE 2010では、ACUの教員によるブログを授業に活用するワークショップ、携帯機器を活用した全学的な取り組みに関する発表が行われました。ACUは、規模

が小さいながらも全米の大学トップ20に選出されるなど知名度も高い教育機関です。ACUでは、以前よりブログを授業に活用するコースブログの取り組みなどITを活用した教育が行われていました。2008年より、大手通信会社AT&Tの支援を受け、携帯機器による教育実践研究が始まりました。また、現在はメディアを活用した教育・研究活動推進のために協調学習の施設（AT&T Learning Studio）を建設し、ITを活用した教育を推進しています。この協調学習空間は、小さなスタジオ、大きめの会議室など多様な目的に対応するようデザインされています。ACUは、2010年秋学期より、全ての学部学生にApple社のiPhoneまたはiPod Touchのいずれかを携帯させ、教育、研究活動に活用しています。2010年実績では、学生の約7割がiPhoneを、残りの約3割がiPodを選択しています。携帯機器は、課題の送受信、授業ビデオの視聴等にとどまらず、授業内で受講者の反応を即座に収集するクリック、コースブログでの意見交換、学生間の協調学習などソーシャルネットワークワーキングの目的にも活用されています。また、ジャーナリズム、IT、アートなど異なる専攻の学生による共同プロジェクトチームがACU電子新聞のiPad用アプリケーションを開発するなど研究成果の実用化も進められています。



アナハイムコンベンションセンター  
メインホール（基調講演）

ACUの報告によると、2年の実践を経て、80%以上の授業で授業内活動として携帯機器を活用し、92%の学生が携帯機器を活用した教育方法を支持しています。また、科目ごとに活用されるコースブログ開設数も大学全体で500近くに及んで

います。こうしたブログの活用はコースブログから学生個人が学習・研究成果を集約、公開するディスプレイポートフォリオと呼ばれる電子ポートフォリオとして形態にも発展しているそうです。

情報技術や学生の変化に積極的に対峙し、新しい学習ツール、学習空間を導入するACUですが、EDUCAUSEでの発表、実践報告では、ある言葉でその姿勢を明確にしていました。“The more things change, the more they stay the same.” 「大きな変化も本質を強固にする以外には、深いレベルで現実を変化させない。」ここで言われる「変化」はIT技術、携帯機器の活用による教育方法の変化で、「同じもの（本質）」は大学の教育目標や理念であるそうです。この言葉は、新しい方法により新しいものを創出するという側面が協調されがちな教育のIT化に関して、別の重要な側面に目を向けさせてくれるものでした。EDUCAUSEの他の発表にも、以前とは異なる学生に対して、新しい技術を用いて本質的な教育の目標を達成するという趣旨のものが見受けられました。このことは本学をはじめ、日本の高等教育機関におけるIT化推進にも大きな示唆を与えてくれるものであると感じました。



アナハイムコンベンションセンター  
EDUCAUSE 2010看板



協賛企業展示会場

## FD活動 行事（実績・予定）

日 程	行 事
9月29日(水)	第5回 FD委員会・FD推進連絡会議
10月 1日(金)	平成22年度後期 ピアレビュー開始
10月12日(火)～ 10月15日(金)	国際会議 EDUCAUSE 2010 参加 米国 カリフォルニア州 アナハイム
10月18日(月)～ 10月22日(金)	国際会議 E-Learn 2010 参加 論文発表 「Construction of Driving Model with Faculty Perspectives of e-Portfolio for Improving University Education in Japan」 米国 フロリダ州 オーランド
10月28日(木)	教育GP推進協議会（FD評価委員会）開催
11月 4日(木)	ICT定期研修会「POLITEを使った剽窃チェックを伴う課題提出」
11月18日(木)	ICT定期研修会「CANVAS、POLITEなどに関するQ&A」
11月24日(水)	第6回 FD委員会・FD推進連絡会議
11月25日(木)	第1回 学生FD シャベリ場「シャベリ報大」開催
12月 1日(水)～ 12月 3日(金)	国際会議 ONLINE EDUCA BERLIN 2010 参加、ドイツ、ベルリン市
12月24日(金)	第7回 FD委員会・FD推進連絡会議
1月12日(水)～	平成22年度後期 学生による授業評価アンケート回収開始 平成22年度「学生が選ぶ教え上手な先生」投票開始
1月20日(木)	国際会議参加報告会（予定）
1月27日(木)	平成22年度 第2回新任教員研修会 「本学におけるIT関連環境の紹介」（予定）

## FD委員会WGの活動実績

WG名	ミーティング
WG 1（学生による授業評価アンケート）	9月15日、10月20日、11月17日
WG 1（学生FDの活動）	10月 7日、10月28日、11月 4日、 11月11日、11月25日
WG 2（ピアレビュー制度の導入）	9月15日、11月16日
WG 3（GPAとコンピテンシーの導入）	9月14日、10月15日、11月12日
WG 4（ICTの活用推進）	9月14日、10月15日、11月12日
WG 5（イベント・教育活動支援情報の企画）	9月17日、10月18日、11月 8日、11月19日
WG 6（チュータ制度の導入）	9月15日、10月14日、11月 9日
WG 7（ファカルティ・ポートフォリオの導入）	9月 7日、10月19日、11月19日
WG 8（カリキュラム・デベロップメント）	9月 8日、10月20日、11月10日
WG 9（Own Teacher制度の導入）	9月22日、11月18日

### 編集後記

何年か前に札幌ドームのスタンド最上段で、プロ野球の試合を見ていた。そのときに小学生低学年くらいの男の子が、私の近くにいた。彼は応援しているチームのチャンスの時、大声で選手の名を呼んだ。大人でも集団で声を出さない限り、とてもバッテリーには届かない距離だ。ましてや小さい身体の彼の声だ。だが、その少年の行為を、「聞こえないから無駄だ」と誰が言えるだろう。彼は自分のできる精いっぱい応援をしたのだ。

FD活動にたずさわって3年が経とうとしている。「自分ができる精いっぱいのことをしてきただろうか」と問いかけてみる。